

「だてマスク」はいかにして問題となったか

—2011年から2012年を中心に—

柿本 昭人

概要

「1. はじめに」三年に及んだコロナ禍は、2023年3月にはマスクの着用が屋内・屋外を問わず「個人の判断」に委ねられ、一つの区切りを迎えたが、この間には自粛警察、マスク警察、帰省警察、不織布警察といった他者の行動を報告・摘発する各種の「警察」が出現したことから、「逆マスク警察」の出現も危惧されている。しかし「必要のない」マスクの着用を問題とする視点は、コロナ禍以前に「だてマスク」として既にあった。「2. 2011年1月～3月」「だてマスク」は若者の問題行動として浮上するが、大人にも広がっていることが判明する。精神医学と心理学では「だてマスク」は「社交不安障害」における「安全確保行動」として位置づけられ、その行動に介入がなければ手放すことができずに「依存症」となる。ここには親密な関係性を前提とする友人・恋愛・結婚そしてキャリア形成においても自己主張的であることが重要であるとする価値観があるが、「だてマスク」が「発見」され、問題として浮上した「2. 2011年1月～3月」にあっても、「だてマスク」に質的分析を加えたとされる『「だてマスク」依存症——無縁社会の入り口に立つ人々』が刊行された「3. 2011年6月」にあっても、そして日本におけるマスクの着用を社会学の立場から分析した『マスクと日本人』が刊行された「4. 2012年12月」にあっても、「だてマスク」を問題とする視点に常に潜在していた。「5. おわりに」その後も新聞は、マスク生産数量の増大には、インフルエンザ、花粉症、微小粒子状物質に対する「だてマスク」の寄与があるとして、「希薄な人間関係」が昂進すると言う。マスクの要否ではなく、この定型化した言説こ

そ分析されるべき時期にある。

1. はじめに

三年に及んだコロナ禍（新型コロナウイルス感染症（COVID-19））は、2023年3月13日からマスクの着用が屋内・屋外を問わず「個人の判断」に委ねられ、一つの区切りを迎えた。コロナ禍にあっては各種の「警察」が出現した。自粛警察、マスク警察、帰省警察、不織布警察に加えて「未接種者を見つけ出すワクチン警察」の出現まで予想されていた（日経2021）。マスクの着脱は「個人の判断」に任せられ「一斉に外せというメッセージでない」はずであるが、この経過のなかでは「逆マスク警察」の出現も危惧されていた（読売2023b）。

2023年5月8日からは、コロナの感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げられたが、一ヶ月ほど経過した6月上旬でも、職場や学校での着用者は5割を超え、政府が着用を推奨した交通機関での混雑時や医療機関では6割を超えていた（朝日2023）。ネット上では、「同調圧力」「ものを考えない」という非難が、マスクの着用者と非着用者それぞれに向けられた。マスクを着ける／着けないの一点に関心を集中させようとする記事もあった（読売2023a）。

「個人の判断」となった以上は、目の前の者がマスクを着けていようがいまいが、それは「個人の判断」の結果であって、その判断に至る思考が妥当かどうかは全く問題になるはずもない。問題でもないものが「問題」となるときには、問題となるべきものが見逃される。例えば、コロナ禍にあっては、流行の波が高まるた

びに必要な医療が受けられず、自宅療養という名の「放置」によって亡くなるケースがあった。緊急時ではなく「平時」を基準にして「効率化」された医療体制の矛盾が繰り返し露呈したが、この矛盾は手つかずのまま残されている。

それにもかかわらず、マスクの着用が殊更に関心の人々の関心の的となるのは、潜在する文脈があるからである。アメリカ精神医学会による診断・統計マニュアルである DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) は診断のガイドラインとして世界中で広く用いられているが、「社会との交流があるときに悩んだり回避する際に、じろじろみられたり評価されることへの過度の恐怖」として定義された「社会恐怖 (social phobia)」が 1980 年の DSM-III に初めて独立した項目として記載された (音羽・森田 2015: 20)。1994 年の DSM-IV では「社会恐怖 (social phobia)」という診断名に「社会不安障害」という診断名が併記された。日本では「社会恐怖」という名称のもたらすステイグマを懸念して「社会不安障害 (Social Anxiety Disorder: SAD)」という表記が 2008 年に「社交不安障害」と変更されている。DSM-III のはるか以前から、日本では「対人恐怖症」という病態として 1930 代から研究対象とされ (朝倉 2012: 1056)、「森田療法」をはじめ現在でも民間療法的な呼吸法による療法を紹介する出版物や広告を目にすることができる。DSM-IV では「社交不安障害」が自己を中心とする病態に対して、この「対人恐怖症」は他者の感情を中心とする病態「Taijin kyofusho (TKS)」として登録された。さらに 2013 年の DSM-V では自己／他者の区分が取り払われている (音羽・森田 2015: 23-24)。

親密な関係性を前提とする友人・恋愛・結婚そしてキャリア形成においても自己主張的であることが重要であるとする価値観の広がりがあるからこそ (櫻井 2013: 11)、《顔》の全面性を部分的にせよマスクを着用する者の「内面」は非社会的であり、治療されるべきものであるという文脈を形成するのである。

マスクの着用は不安を軽減する「安全確保行

動 (Safety behaviors)」とされ、それが「現実には SAD の症状を維持する機能を担っている」ので、マスクが手放せない「依存症」という表現を引き寄せる。これに対して「心理教育し、マスクを着ける頻度を減らすような介入」をすることが、精神医学や心理学では議論されるのである (志村・田中 2017: 27, 31)。

ここに「本来の目的から外れた」「必要のない」マスクの着用として、発見され、報告され、治療を要するものとして問題化される「だてマスク」が登場した時期について振り返る意義がある。社会科学においては、「だてマスク」を主題的に取り扱った論考は、本稿において取り上げる単行本 (堀井 2012) を除いては見当たらない。「だてマスク」についての議論を振り返っておくことは、今後の感染症流行後の社会にあって、問題ではないものがどのようにして問題化されるのかという際に、ぜひとも必要な作業なのである。

2. 2011 年 1 月～3 月

「風邪でも花粉症でもないのに、年中マスクを手放せない子たちがいる。素顔を隠す「だてマスク」だ」(朝日 2011a)。この記事が出る前後の状況はこうであった。2009 年 4 月に「新型インフルエンザ」(Pandemic 2009H1N1) の発生を政府が宣言し、終息宣言が出されるのは翌 2010 年 3 月末である。そして 2010 年末から翌年 1 月にかけては、インフルエンザの流行が、その「季節」を迎えていた。

「若者文化」となれば、1990 年代以降、大方の「震源地」は渋谷となるのが通り相場であるが、このときはまるで新種の発見に人里離れた奥地に向かう昆虫学者や植物学者然とした佇まいの記述から始まる。「若者研究が専門の博報堂のアナリスト原田曜平¹」と記者の秋山千佳が半信半疑で取材に向かったのは、2010 年 10 月だった。原田が目撃した群馬県高崎市に向かう。しかし「新種」のマスク着用者は「あっけなく見つかった」。

¹ 「だてマスク」の名称について、原田曜平がその「名付け親」であるとする (読売 2015b)

「だてマスク」の着用者は15歳の高1男子である。花粉症をきっかけにマスクを着けたのは中学2年のときだったが、「着けると安心」ということで、真夏以外はいつも着けるようになったと言う。自宅でも「完全に外すのは飯、風呂、寝る時だけ」であり、別の高校に通う友人三人も「だてマスク」をし、同じ高校のクラスでも「だてマスク」の生徒がいることを証言している。「だてマスク」について両親も教師からも「別にいいんじゃないの、という感じで」咎め立てられることもない。違うのは、マスクをしていると怒られても「聞き流したり反抗したりできる」が、外していると「こたえる」。それに対して秋山は「マスクで隠しているのは『自信のない自分』なのでは——。話の端々から感じた」と記す。

この時点で既に「だてマスク」には負の価値づけがなされていた。この価値づけは、「鼻から下を隠せば目の小ささがばれない」ということでコンプレックスを隠すために常用する滋賀県の中2女子の例が補強する。その一方で、東京の高3男子は「集中できるから勉強もはかどる」とその正の価値を強調するが、この効用の対立を秋山は深めることもない。高2女子は「顔を隠せて視線にさらされない安心感」を着用の理由とするが、「着けなくても生きていけますよ」と言う。「だてマスク」を「手放せない」ものと定義しながら、「なくても」の発言は秋山に無視される。

「約240通の感想が寄せられた。多くはマスクや服で自分を覆って生きる同年代からの反響だった」ということで、この記事への「同世代から共感・応援」が強調される(朝日2011b)。「戦闘服」として「姫系ロリータ服」で通信制の高校に通う女子高生は「他人との距離を保つための大事な道具。マスクで顔を隠すのも同じだ」と言うが、マスクが覆うのは顔の下半分である。高2女子の彼氏が「本当は大声で笑う人」でありながら「学校で「クールキャラ」を貫くためにだてマスクをしているの」を知る。それによって「自分も本当の自分を出せるようになった」と言うが、彼氏は「本当の自分」を「だてマスク」によって隠しているはずである。彼女は どう励まされたのかは不明なままであった。

2011年2月になると、「だてマスク」という言葉の認知度が急速に高まったのであろう。こ

れが「だてマスク」に先行する「タイガーマスク運動」と重ね合わされる。2010年のクリスマス頃から「伊達直人」を名乗ってランドセルをはじめとする学用品を児童施設等に贈ることが流行となっていた。川柳にもそれが現れている。「タイガーの後に出来ただてマスク」(読売2011)。「天声人語」も「タイガーマスク運動」と「だてマスク」を結びつける。「虎の覆面ならぬ、伊達眼鏡のマスク版だ」と言う(朝日2011c)。「個人をさらしたくない、自分の世界に浸りたいという内向きの心」が「自分以外の全部」との断絶を志向すると断定される。「己を引き立てる伊達眼鏡と、消し去るだてマスク」ということで、特定の空間、特定の人物との関係を超えて、「だてマスク」とは自分自身を見ないための用具であると位置づけられる。「だてマスク」は若年層の問題行動であった。

これから社会と切り結ぼうかという世代が、お手軽に閉じこもる傾向は危うくもある。受信発信はケータイに限り、イヤホンとマスクでちまたと絶縁する。個室ごと街に出たも同じで、生活力は身につくまい

この「天声人語」は「減る一方の若者がマスクの中に隠れては、時代の元気も消え失せよう」と憂慮の念を表明したが、同日の夕刊では「大人からも共感の声が相次いで、「だてマスク」が大人にも広まっているという記事が出る(朝日2011d)。記事の執筆は「だてマスク」の発見を記した秋山千佳である。同級生の親や近所の人に対して、会いたい／会いたくないのを基準にマスクを外す／外さないのを使い分ける49歳の主婦、「自信のない口元や、夕方になると伸びてくるひげを隠せて、安心する」ので外では必ずマスクを着用する52歳男性会社員、2009年の新型インフルエンザ流行を契機に化粧をしない「後ろめたさをごまかす」51歳パート女性、職場でのストレスを緩和して「窓口で市民に激高されてもパニックに陥らずに冷静に話せる」安心感から職場でマスク姿を貫く50代男性公務員が登場する。心理学を専攻する有識者によるコメントは、「かつてのギャングロや目力メーク」と同様に「他者の目に対する強い意識」がマスクを着用させるという図式を示す。

「他者」とは誰なのか。ここに登場する大人

たちも特定の空間と時間にあって「わたし—あなた」という関係を強制される場面で困難を感じ、しかもその場面そのものから退出することなく「だてマスク」を着用するのであるが、その状況は消し去られてしまうのである。

この時期の新聞・雑誌への「だてマスク」の登場の区切りに位置するのが『女性セブン』（2011年3月10日号）「若者たちに急増中 マスクなしで出かけられない症候群 風邪でも花粉症でもないのになぜ？ 自分の本音を他人に知られることが怖い若者たち」（女性セブン2011）である。「インフルエンザが流行」「花粉は昨年に比べて5～10倍の飛散量」ゆえにマスク姿を多く見かけるのだが、「別の理由」でマスクを着用する者が多いと記す（同上：65）。渋谷センター街では、「4人に1人はマスクを着けて」いたが、「マスクをしている理由は？」と「マスク姿の10代～30代100人に」アンケートを実施する。その結果は、54人が「風邪・インフルエンザ予防」、15人が「花粉症」、31人（男性9人、女性22人）が「その他」であった。「だてマスク」は3割であったが、「風邪・インフルエンザ予防」をマスク着用の理由とした者のうちにも「マスクをしていると安心感がある」という者もいた。「その他」の具体例としては「知り合いに会っても自分だと気づかれないから」「クラスメートがしていてカッコいいから自分も何となく」「誰からも見られていない感じで落ち着く」「営業の途中でサボっている」「誰とも話したくない気分だから」「目が大きく見えるかなと思って」「歯の矯正を見られたくない」「眠いのを隠すため、バイト中はいつもする」「化粧する時間がなかったから」が挙げられている（同上：66）。

「だてマスク」を「発見」した博報堂若者生活研究室の原田曜平は、「マスクをする若者が増えている背景について、路上で1000人以上の若者に話しかけ、彼らの文化の調査・研究をしている」（同上：66）専門家としてこう解説する。

メールやSNSなどネット上のコミュニケーションに慣れた若者が“だてマスク”をするようになっていないのでしょうか（同上：67）

携帯やパソコン上の文字だけのコミュニケーションでは、そのような要素がないため、互いに本音を隠したままでことを進めることができる。それに慣れてしまった若者たちは、まず自分の本音を他人に知られることが怖い。そして自分の弱みを知られることを嫌うのではないのでしょうか（同上：67）

この解説は、1990年代後半からのWindows95の登場や1999年のiモードにおけるメールサービス開始を皮切りに携帯電話・PHS向けの電子メールサービスの提供が続いて、間接的なコミュニケーション、非対面のコミュニケーションの広がりを若者の行動変容や社会問題と結びつける議論を思い起こさせる。SNSについても2004年2月から日本のSNS創生期を支え、「コミュニティ」の機能の特徴とする「mixi」のサービスが始まり、2010年代もサービスは続いていた。

そうであるならば、「だてマスク」は2010年代よりもはやくに起きてもおかしくない。マスクを着用する機会は、ゼロ年代に続いた感染症の世界的流行によって継続してきた。2003年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、2004年の「高病原性鳥インフルエンザ」（H5N1型）そして2009年から2010年にかけての新型インフルエンザ（A型H1N1-インフルエンザ）である。

「だてマスク」はその登場から、負の価値づけ、問題含みであるという位置づけで登場したが、この記事では精神科医・教育評論家である和田秀樹による「警鐘」に「障害」「依存」という「病理」としての価値づけが行われていた点に注目したい。

リアルなコミュニケーションを避けるのは、社会不安障害²に近い症状です。マスクは、引きこもりにならないよう何とか外に出る

² 「社会不安障害」という表記については以下を参照のこと。「SADの日本語表記については、「社会不安障害」とされていたが、2008年の日本精神神経学会による精神神経学用語集より「社交不安障害」と表記されることとなった。また、2013年に改訂されたDSM-5のsocial anxiety disorder (social phobia)の日本語表記は「社交不安症/社交不安障害(社交恐怖)」となされることとなった」（朝倉2015: 413-414）

ための一種の防衛装置ですね。おそらく、だてマスクをしている若者たちは暖かくなればはすそうと思っている人が多いでしょうが、表情を読まれないことに慣れると癖になってしまう。春以降もマスクに依存してしまう人は多いと思いますよ(同上:67)

和田は1980年のDSM-III(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)ないし1994年DSM-IVなどの診断基準が念頭にあるのであろう。「障害」や「依存」という言葉が医学上の観点からのものであれば、マスクの着用をやめたくてもやめられず、日常生活や社会生活をおくるにあたって、支障をきたしていることになる。「だてマスク」の効用は「隠す」に還元できないものもあつたが、和田の指摘を受けて、この記事は「花粉症の季節が終わってからもマスクを手離せないという人は、“引きこもり予備軍”である可能性も否定できない」と言う。しかし、これは、メディアによる「病気作り」ではなからうか(櫻井2013:11)。

3. 2011年6月

菊本裕三『[だてマスク]依存症～無縁社会の入り口に立つ人々～』の刊行は、「だてマスク」の認知の広がりや家族や友人に囲まれた豊かな人間関係からの脱落を意味する「無縁」への恐怖の広がりや交差する時期にあつた。「無縁」への恐怖はNHK『無縁社会～“無縁死”～3万2千人の衝撃』(2010年1月31日放映)がその嚆矢であつた。

著者の菊本が「だてマスク」について、いかなる価値判断に立っているかは、そのタイトルにある「依存症」という用語が示している。「だてマスク」は、手放すことができない問題行動として捉えられる。また、サブタイトルにある「無縁社会」は人々の十全な繋がりが確保された「有縁」の対語としてあり、「無縁」とは人々の繋がりに切り離された、ないしは自ら進んでその繋がりを断ち切った、「孤独」な人々の集積を含意しており、有縁社会が正の価値づけがなされるのに対して、負の価値づけのもとにある。

本書の帯をみれば、「だてマスク」が著者に

よっていかなる価値づけにあるかは、より直截に見て取ることができる。「風邪でも花粉症でもないのに、外出時にマスクをつけていると『何となく安心する』人が、ひそかに増殖中!」「10分=1000円で延べ約1万5000人の電話相談を受けた“話し相手サービス”の代表が緊急提言」「春日武彦氏(精神科医)との対談も収録」「これは、危うい現象だ!」この帯の文言の並びは、「延べ約1万5000人」という数字の大きさが「ひそかに増殖中」を裏づけ、「だてマスク」着用者は「依存症」という病としての問題を抱えているという著者の認定が「精神科医」という専門家からお墨付きを得ているという流れとなっている。

著者の菊本が提供する電話サービス「聞き上手倶楽部」は、「まえがき」によれば、当初は独居の高齢者、一人暮らしの上京大学生が話し相手を求めて利用すると想定していた(菊本2011:2)。しかし実際の利用者は、「無縁」=孤独な人々でなく、「普通に家族や同僚、あるいは恋人がいたり、一緒に遊びに行く友達がいるような」人との繋がりを保持しているはずの「有縁」の人々であつたことに、著者は驚いたと記す(同上:2-3)。

「周りに話のできる親しい人がいるのに、なぜ?」という問いに対して「友人・知人がいても、自分のことを理解されたり認められなければ、それは孤独であることと同じかもしれない」という「仮説」を立てる。

「有縁」な環境にありながら、内面は「無縁」な孤独な人々の「象徴」が「若い人を中心に増えている[だてマスク]をつけている人たち」であり、「病気でもないのにマスクをつけていると安心する人たち」だというわけである。「電話をかけてくる方のなかには[だてマスク]をつけている人も少なくない」ので、解決策を示せるのは自分をおいて他にないという自負も表明される(同上:3)。

本書の第一章には「[だてマスク]急増の実態」とあるが、「延べ約1万5000人」の電話サービス利用者のうち、「だてマスク」利用者の比率やその経年変化が明らかにされて「急増の実態」が示されているわけではない。

2010年の後半あたりから、首都圏の都市などで「だてマスク」をつけた中高生の姿

が見かけられるようになった（同上：10）。

2011年に入ると、都内でも「だてマスク」をつけた若者が増え、同時に大人たちのあいだにも目立つようになってきた（同上：11）。

後者の引用は、インターネット配信版を含む「マスクなしで出かけられない症候群」での「渋谷のセンター街で行われたマスク姿の10代～30代の男女100人へのアンケート」に基づくものである（同上：12）。

「彼らはなぜ、[だてマスク]をつけるのか？」という問いが立てられるが、「効能」はひとそれぞれのようだ」として答えは、ここでは未決のままである（同上：10）。電話サービス利用者から、その効能について証言したのは二名のみである。男子高校生（同上：10）と女子高校生（同上：11）であるが、男子高校生が示した「効能」は何かに収斂しないままである。彼の証言から「他人との距離を取ろうとしてる」として、菊本が「本当の自分を守りたい」という考えを引き出すが、この「本当の自分を守る」が「だてマスク」を着用する理由として以後の記述を導いていくことになる（同上：13）。

「本当の自分を守る」というフレーズ自体に菊本が触発されたのか、「だてマスク」と同様の「本当の自分を守る」「鎧」や「戦闘服」として、ロリータ・ファッション（同上：13-16）と「男性の“お化粧”」（同上：16）が取り上げられる。前者は「休日の原宿で、ロリータ・ファッションに身を包んだ高校二年生の女子二人連れに話を聞いた」ものであり、後者は電話サービスの利用者である。この男子高校生の証言では、菊本からの誘導があったのか、こう述べている。「本当の自分？そういうこと、あまり考えないから」（同上：18）ということで、「本当の自分を守る」という菊本が想定する着用目的が否定され、「化粧すると、何か自信がつくんですよ」ということで「変身」を男子高校生は強調する。

「だてマスク」やロリータ・ファッションそして化粧をする男性たちが、そのツールを身に纏うことによって自信をもち、交流の輪が広がってしまう事例を希釈化するために、彼らを「10分1000円という料金を支払わないと話し相手に困るほど孤独な人」として菊本は再設定する（同上：21）。そのうえ「だてマスク」を

着用していなくとも、それは「目に見えないマスク」「心にマスクをつけている人」であると認定し、「だてマスク」はマスク未着用の人々にも拡張され、その目的は「本当の自分を守る」ところにあるという菊本の主張が強化されるのである。

第二章のタイトルでは「[だてマスク]をつけた人たちは、どこで自分を出すのか？」ということで、菊本が抱えている規範があらためて示される。マスクの着用は「本当の自分を他人の視線から隠す」ものであり「他人が立ち入れない安全圏に自分が閉じこもるようなもの」である（同上：26）。ところが、「引きこもり」と違って、社会生活を営むとなれば「他人との接触が不可避」となる。「だてマスク」は「肉体的には社会に参加しながらも、精神的に引きこもっているような状態」を引きおこす。「コミュニケーション能力が高ければ、環境によって相手との距離を適切に調節することもできる」が、「だてマスク」が「日常の悩みなどを打ち明けて解消すること」を邪魔立てし、「新たなストレスを抱える」ことになる。そのストレスを解消するべく、「お金を支払ってまで」電話サービスを利用する。これが菊本の描く「だてマスク」着用者と「聞き上手倶楽部」との関係の要約である（同上：26-27）。もちろん、「だてマスク」を物理的に着用しているかそうではないかは、菊本にあっては区別がなくなることは先程述べたとおりである。

菊本が「聞き上手倶楽部」という電話サービスを始めようと考えたきっかけは、彼が以前ヘアスタイリストを生業としていた時期の経験にあった。美容師の収入は歩合制であり、指名客を多く確保できれば、それだけ収入が増え、安定する。多数の指名客を確保する先輩のたちの振る舞いを観察すると、「お客様に喋らせるようにうまく誘導し、むしろ聞き役に徹していた」「口数は多くなくても笑顔で相づちを打つような『受け』のタイプの人が多い」ことを発見する。なぜ、こうした振る舞いの美容師が多くの顧客を確保することになるかといえば、「そもそも、人は話を聞いてもらうことに快感を感じる生きものだ」というのが菊本の見解である（同上：34-35）。

「聞き上手倶楽部」という事業のネーミングの妙はその「聞く」にあるわけだが、彼はこの

点について次のように述べている。

私たちの仕事を正確に言い表すのなら本当は「聴き上手倶楽部」とすべきなのである。「聴き上手」とは「話させ上手」と言い換えてもいいだろう。相手が本当に話したいことが何かを探り、相手が自然に口に出せるように会話を自然な形で構成していき、時には誘導もする。……(中略)……だが、悩みを抱えて他者に相談する人のほとんどは、実はすでに答えを自分で見いだしている場合が多い。つまり、本当のところ、話すこと自体が目的なのだ(同上:37-39)。

「聞き上手倶楽部」は電話サービスであるので、美容師とは違って非対面である。美容師が多くの顧客を確保するには、相手の要望通りに髪を仕上げるスキルに加えて、菊本が言う「サービス」を対面で提供しなければならない。菊本が引用する『女性セブン』の記事には、美容師ではないがエステティシヤンの女性が、サービスにおける負荷とその解消方法について、こう述べていた。

マスクは自分にとっての自己防衛。仕事中はいつもマスクをしているが、苦手なお客様と接するときは、目は笑いながら口パクで文句を言っている。マスクは本音を隠すことができる隠れ蓑としても必要なんです(同上:12)

「聞き上手倶楽部」のサービスにしろ、エステティシヤンによる「聞き役」のサービスにしろ、それらは通常の「契約関係」とはズレがある。近代的な契約関係が交換において相互に独立した対等な二人がある一点において合意するとするなら、ここではサービスを提供する側とそのサービスを受け取る側が相互に独立した対等な二人とは様相を異にしているからである。後者は、一方的に自分の思いを存分話すことを求め、前者は後者のその要望が全面的に叶うように、全力でその独白が展開される環境を整えなければならない。契約者の一方は「奴隷」にして、もう一方は「主人にして拷問者」という関係である(Deleuze 1967=1973: 80=116-117)。くだんのエステティシヤンは契約における等価

交換からはみ出していく「奴隷」としてのありかたに、マスク越しに「目は笑いながら口パクで文句」を言うことで交換における差額分を取り返すのである。

顧客が増え、ビジネスが成功することは、同時に「悩みや不安を抱えた人が話すことの快感を得て癒やしやカタルシスを得る機会が増えたということ」だと菊本は、「聞き上手倶楽部」のサービスの存在意義を誇らしく記している(菊本2011:43)。「しかし」と彼は言う。「奴隷」の側が「主人にして拷問者」に向かって、異論を差し挟むのである。「なぜ、家族や友人・知人など近い人間がいながら、グチや悩みを話せないのだろうか」(同上:43)。これが菊本の規範であり、彼が「心のマスク」を外して吐露する「本音」なのである。「まったくの他人に自分の本音を打ち明ける人たちは10分1000円という対価を支払い、「主人にして拷問者」の立場を一時の享楽として購入する。対価も支払わず、思う存分自分の独白を聞かせるという「主人にして拷問者」の立場を手に入れるなら、それは文字通りの主人にして拷問者となる。

顧客が「まったくの他人に自分の本音を打ち明ける」ことに我慢がならずとも、菊本は契約に従い、電話サービスという非対面でのサービスによって「マスク」をし、自分自身の「本音」を隠したまま「心にマスクをつけて」対価を得て、事業を成功させるために「奴隷」の役割を引き受けていたはずである。先程のエステティシヤンは「口パクで文句」を言うに留まったが、菊本は我慢の限界を超えた差額分を取り戻すために本書を刊行したことになる。

「第三章 まったくの他人に自分の本音を打ち明ける人たちの冒頭で、菊本の規範が「本来、家族や友人などの親しい間柄の人が相手だからこそ、人は自らの悩みを打ち明け、些細なグチでもこぼすことができるのではないのか」(同上:46)と述べられているのだが、正反対の見解も述べている。

近い関係の人間の前では、別の自分を装っていることを知られたくないと思うのは自然なことだ。……(中略)……近い関係の人間に対するときほど、人は装いたがることもあるのだろう(同上:58-59)。

もしこちらの事態が「自然」であるなら、菊本の規範の方こそ「不自然」なのである。「主人にして拷問者」に対する「奴隷」の役割を、親子だから、兄弟だから、家族だからといった「自然」なものに依拠した繋がりによって対価は既に支払い済みだとして実行すれば、その代償の方が大きいと考えるからこそ実行を踏みとどまるのである。

そして「聞き上手倶楽部」では決して行われない顧客へのアドバイスが行われる。「まずなすべきなのは、自分を装うというその場しのぎの“鎧”を脱ぐこと」である（同上：62）。「それをつけることが本質的な問題を手つかずにしてしまう」から「すぐにマスクを外して問題に対処すべきだ」（同上：76）と菊本は「本当の自分」の考えを表明する。「日常的につけている人以上に、そのような目に見えないマスクをしている人のほうが多いのではないか」（同上：46）が正しければ、そもそも本書のタイトルには疑念が湧こう。

「第四章 現実に [だてマスク] をつけている人たち、つけたがる人たちの心理」では、論旨がさらに乱れてくる。「実際に [だてマスク] をつけているのは中高生だけではない」（同上：78）という小見出しに続く記述はこうなっている。

電話をかけてくるクライアントの中には、実際につけているという社会人も少なくない。……（中略）……ストレスに満ち溢れた現代社会ではむしろ大人のほうが [だてマスク] を欲しているようにも見えるし、実際に人との接触を嫌い、街中でつけているという人の話を聞くことも少なくないのだ（同上：78）。

「だてマスク」をつける必要性は、若者より大きなストレスに曝される大人の方が大きい、という菊本の主張である。ところが、「大学生のときに演劇に目覚め、現在もプロの俳優を志しながら、劇団活動をしている」（同上：112）という「聞き上手倶楽部」利用者の事例から、先程の小見出しを否定する「思春期は心に、大人になったらリアルに [だてマスク] をつける」という小見出しが出てくる。「だてマスク」の着用が若者だけではなかったはずが、ここでは若者は「だてマスク」ではなく「心にマスクを

つける」と一般化されてしまう。

この利用者が家族にも劇団の活動とアルバイトを両立する困難について相談できないのは「困ったときだけ相談するのは虫がいい気が」とすると説明している（同上：115）。「関係が近ければ近いほど今の自分の姿を隠そうとする」彼の振る舞いは、第三章での「近い関係の人間のの前では、別の自分を装っていることを知られたくないと思うのは自然なこと」のように菊本には是認されず、今度は「大丈夫な自分を装っている」だけであると否定される（同上：116）。

菊本の規範からすれば、「聞き上手倶楽部」では言えなかった本当の主張は、問題を解決するには家族に窮状を明かすこと、明らかにできるような人間関係を築くこと、そのためには「だてマスク」を先ずは外せということになる。「だてマスク」は「自分の本当の姿を自分自身からも隠す」（同上：121）からである。

「第五章 菊本裕三×春日武彦・緊急対談 [だてマスク] は、こんなに危ない」の冒頭では、菊本は「だてマスク」をつける理由を「本当の自分を隠すためであると断定し、[だてマスク] の着用という一時しのぎの逃避によって「本当の姿を覆い隠す [だてマスク]」がより大きくなり（同上：68）、「人との距離をより大きくする」（同上：99）としていたはずだが、春日には着用の実態は判明しなかったと説明する（同上：124）。

この第五章での精神科医である春日武彦との対談によって、「[だてマスク] の実態を解き明かそうと試みた」と言う（同上：124）。その目的は果たされたのか。

菊本 一方、話したいと望む側も、程度の差はあるにせよ本音はなかなか言わない。別の自分を「装う」人も多い。まあ、場や相手によって人間はいくつもの「自分」というか「装い」を持っているものですし、例えば会社では普通、まず本音を出さないですよ。

春日 それは出す人間のほうがおかしいですよ。

菊本 そうですよ（笑）。通常、どんな人でも会社では「オフィシャルな顔」をしているものです（同上：132）。

菊本の規範からすれば、「だてマスク」は「本当の自分」を覆い隠し、「本音」を言わないでおくことは「別の自分を『装う』」ものとして問題行動であったはずである。しかし、春日から「それは出す人間のほうがおかしいですよ」と言われると、「そうですね(笑)」と同意してみせる。菊本は電話サービスの利用者が電話で話している際には、料金の対価としての「オフィシャルな顔」を装い、利用者に思う存分に話をさせることに注力するが、その姿は菊本の「本当の自分」ではなかった。しかし、本書では、それでは問題は解決しないどころか、問題は深まるばかりだと主張してきたのである。

菊本の規範を彼が心底正しいと考えるなら、「オフィシャルな顔」ができるのは、「だてマスク」をつけているのと同じであり、「心にマスクをつけている」からであると春日に反論すべきであろう。あるいは「聞き上手倶楽部」で受話器越しに利用者に思う存分話をさせる身振りでもって、目の前の春日にも対応してしまったのであろうか。

春日は「だてマスク」が「ひと昔前の「ガンダロ」もダブって見えます」(同上:141)ということで、この二つの同質性、連続性を主張する。「『自分のほうを向いてほしい』と『自分を隠したい』が同居している。つまり矛盾している」をもって、「ガンダロ」と「だてマスク」に共通する特質としている(同上:144)。しかし、菊本が紹介してきた「聞き上手倶楽部」のサービス利用者たちの証言では、「自分のほうを向いてほしい」という自己呈示的な心情から「だてマスク」をつけているという事例はなく、「自分を隠したい」が理由であり、そのことは物理的にマスクをつけているかどうかにかかわらず、菊本は問題行動つまり菊本の規範からの逸脱としてきた。そうであるからには、春日の見解には否定の発言があると予想されるどころであるが、そうはならなかった。

菊本 「かまってほしい」というスペシャルな扱いを求める一方で、「ほっておいてほしい」から「だてマスク」をつける人たちがいます。彼らは普通に社会生活を営んでいて、家族や友人との関係も築いていますが、メンタルは引きこもりに近いのでは、

とも思うんです。外に出て活動しているからそうは見えないだけで(同上:149)。

物理的に「だてマスク」をつけていない「心にマスク」をつける者を除外するとしても、菊本の規範のなかに「だてマスク」着用者が収まるには、まずは「だてマスク」を外させることが要件となる。「[だてマスク]を外すには、どうすればいいのか」という小見出しの後にはこうある。

菊本 [だてマスク]をしている人に何か言うことによって、これを外させるというのは不可能なんじゃないですか。……(中略)……僕には外させることは到底できない。……(中略)……[だてマスク]をつけることで、デメリットのほうが著しく大きくなった場合には外すかもしれませんね。

春日 偉い人に「人前でマスクしているなんて失礼だろ！」って怒られたり(笑)。

菊本 若い人なら、マスクしてないほうがモテるよ、って言うだけで外す気もするんですけどね(笑)。わりと単純なような気がします。

春日 確かに「モテる」というのは殺し文句で、効き目はありそうですね(同上:179-180)。

「不可能」「到底できない」という強い言葉、易々と見つからないことを予想させる言葉が出てきたそのすぐ先で、解決法は発見されてしまうのである。春日もそれにお墨付きを与える。

「止めたくても止められない」状態が「依存症」についての極々一般的な理解であるとすれば、菊本の言う「依存症」とはかなりの懸隔がある。帯には「これは、危うい現象だ!!」とあるが、正確には「結構危うい現象なのかもしれませんね」(同上:190)とあって、強度は下がるが、「だてマスク」が重大な問題として扱われるべきだと菊本は主張しているものと考えてきた。しかし、それは見当違いであった。

「あとがき」となるとこの軽いトーンはさらに昂進する。

読んでいただいた皆さんも、もし周囲にい

つもマスクをつけている人がいたら、何げないひと言をかけて、耳を傾けてあげてほしい。そこから、いろんなことが解決するような気がするのだ（同上：192-193）。

2011年の時点でも、「いつもマスクをつけている」からといって、それが「だてマスク」である必然性はない。風邪かもしれない。花粉症かもしれない。あるいは持病を抱えていてマスクをつけざるを得ない状態の人かもしれない。そうした可能性を想像することは菊本にはできない。そして何より菊本が忘れているのは、「聞き上手倶楽部」は10分1000円の有料サービスであるという点である。読者には本を購入させたうえに、対価も支払わずに無償で「主人にして拷問者」としての菊本の独白を「奴隷」として一方的に聞き届けることを要求するのである。しかも最後には、マスクをつけている者に読者は自ら進んで「奴隷」としての役割を無償で引き受けよ、と言うのである。

菊本が取り上げる電話サービス利用者たちの証言では、マスクをつけるのは特定の誰かであったり、会社のなかの部署であったり、一時的に「特定の」誰かに対応しなければならなかったりというケースばかりである。私とあなたという一人称と二人称という関係ばかりなのである。不特定多数の三人称に対してマスクをつけているわけではない。

視線を交わさない、他者の侵入を許さないとすれば、既に当時であっても、ヘッドフォンやイヤフォンで耳を塞ぎ、携帯電話や利用者が増え始めるスマートフォンで目を塞いでいる状況には、全く関心を払っていない。もちろん、「聞き上手倶楽部」では、電話ということで視線は交わされないままであることにも気づいていないのである。

4. 2012年12月

『マスクと日本人』の著者である堀井の専門は社会学であり、彼は大学教員である。執筆時に堀井の生活の拠点はイギリスであった。

風邪やインフルエンザ、そして花粉症の季節もマスク姿の人を見かけることはな

い。……（中略）……公共の場所で一般の人が顔を覆う姿は目にしない。マスクを着けて街を歩こうものなら、周囲から不審と怪奇の混じった目で見られてしまう（堀井2012: 7-8）。

堀井の執筆動機は、「街中ではほぼ一年中、マスク姿の人を見かける」日本と欧米とのマスクを巡る状況の違いから「日本人はなぜマスクを着けるのか？」という疑問にあった（同上:9）。マスクの着用について、欧米が科学的であって、日本が非科学的＝後進的という図式に与せず、「文化」の問題として論じるという（同上:10）。

堀井は「日本人はなぜマスクを着けるのか？」という問いに対して、サリー・F・ムーアとバーバラ・G・マイヤー・ホフによる共著『*Secular Ritual*』から、「儀礼」の特徴として「文化的空白にたいする文化的秩序の主張」と「文化の不確実さに対抗する主張」という論点を抽出する。その意義について、こう解説している。

人々が何をすべきかわからず混乱している状況に秩序を与え、「祈る」という行為や「儀式」「呪術」「占い」などと称される所作も、その代表例だろうか。マスクに当てはめれば、健康者が感染予防として着用するとき、それは「お守り」のような機能を果たしていることを指す（同上:206-207）。

マスク着用によっても、感染症というリスクを低減させるには不十分であることはよく知っているが、それでも「儀礼」としてマスクを着用してしまう「文化」を次のように堀井は総括する。

マスク着用というリスク儀礼は、多様な目的で実践され現代社会に安心を提供する。さまざまに異なる不安は、一つの行動様式のもとに解決されるのだ。それは、複雑化した世界のなかできわめて便利な道具と言える。それゆえに、もっとも一般化されたかたちで日本人の日常生活に根づいているのだ（同上:245-256）。

これが堀井の主張の眼目である。2020年初頭からの新型コロナウイルス感染

症(COVID-19)が三年を経過しても、未だ完全には終息していない現在においては、マスク着用の嚆矢としての第一次世界大戦を挟んでのスペイン風邪を枕に、新型コロナウイルス感染症こそがマスク着用についての新しい状況を生み出したかのような議論が多い。そのなかで忘却されてしまった過去を堀井が思いださせてくれる点については、大いに強調しておくべきである。

2003年のSARS(重症急性呼吸器症候群)にあっては2003年4月にマスク需要の急増があったこと(同上:175-177)。それ以降、マスクが国レベルでの感染症対策として人々に浸透していく。2004年には「高病原性鳥インフルエンザ」(H5N1型)の流行において人への感染例が報告され、2007年厚生労働省の新型インフルエンザ専門家会議による「新型インフルエンザ対策ガイドライン(フェーズ4以降)」の発表、翌2008年には「新型インフルエンザ流行時の日常生活におけるマスク使用の考え方」の発表が続いた(同上:178)。2009年には「新型インフルエンザ(A型H1N1-インフルエンザ)」の世界的流行が起きる。堀井は、マスクが「事件のシンボル」として重要な役割を担った経過を詳細に記している。2009年5月の半ばには「見えない敵」から身を遠ざけようと、人々があらゆる場所でマスクを着用し、マスクを求めて人々が行列をなしていたことも記されている(同上:190-203)。

堀井が「だてマスク」に言及するのは、2011年の東日本大震災との絡みからである。

近年はマスク着用の目的の裾野が非常に拡大し、二〇一一年三月一日の東日本大震災以降は、福島原子力発電所事故による被曝予防としても使われている。そのほかにも、日常生活の場でさまざまな不安を吸収するための道具として用い、それが「だてマスク」として話題になったことは記憶に新しい(同上:20)。

ここでは、「だてマスク」とは本来の使用価値や目的を離れて、「不安を吸収するための道具」と化したマスクであると読める。『ロサンゼルス・タイムズ』が被曝予防のためのマスクを「白いセーフティー・ブランケット」と論じ

る記事の正当性を堀井は記す。しかし、そうであれば堀井が言う「具体的な防護策や解決策がない危機的状況下で不安を解消し、精神的安定を取り戻すためのセーフティー・ブランケット」とは、まさしく「だてマスク」に他ならなくなる。さらにこうも堀井は述べている。

解決手段を持たないがために発生する不安は、マスク着用という手段を用いた行動へと「昇華」し、そのなかで不安はマスクへと「吸収」され、精神的な安定を取り戻す。上記のような行動様式を、本書では「リスク儀礼」と呼ぶ(同上:21)。

大人が「セーフティー・ブランケット」から抜け出せないという表現からすると、『ロサンゼルス・タイムズ』は日本の社会を問題ありつまり病理的な社会であると見ていることになる。

堀井はマスクの着用の有無を「文化」の違いであることを強調するが、イギリス『タイムズ』の記事「マスクの後ろに隠れる十代の若者は国家の病を映し出す」について、「だてマスク」における習慣的なマスクの着用は「日本の社会病理」であり、「非常に異なる性質を持つ『引きこもり』と『ギャル男』も、日本の経済・政治問題に呼応した危機の表れと語っているのが興味深い」と積極的に評価している(同上:33-34)。

堀井が再度「だてマスク」を取り上げるのは「孤立する自己を守る」の小見出しのもとである。堀井は執筆時の状況をこう把握する。「新型インフルエンザや放射能の不安に象徴される、共同体が見えないリスクによって侵されるという不安」に取り囲まれている(同上:238-239)。「だてマスク」は「リスク儀礼」として位置づけられるので、「個々人の日常生活上、不安を吸収する道具として活用され、これは近年におけるマスク着用目的の裾野の拡大でもある」(同上:241)という評価となるのである。

堀井は菊本の著書を「家庭や社会の人間関係において『本音』を言えず孤立し、極端な防衛本能のためにマスク着用によって顔をさらすことを拒むと論じている」と要約するが(同上:241)、次のように批判する。

菊本は、「だてマスク」の問題を「無縁社会」

という文脈で論じようと試みているが、そう名づけられた社会空間における個々人の「孤立」の構造は分析されていない。それは、現代における「親密性」や「自己」の特性、そこに浸透する消費文化や市場主義との関連において論じられるべき問題だろう（同上：241）。

堀井は現代について「自由と平等が極限まで推し進められ、近代の理想が成就した時代」であるが、「自由の名のもとに競争は激化し、敗者になれば努力不足の自分が悪いと責任を追及される」時代であるという。「生き方を教えてくれる人は誰もいない」（同上：243-244）。

堀井は土井隆義『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』（岩波書店、2009年）に依拠しながら、こうした時代にあっては、一定の「キャラ」でもってグループ内での居場所を確保するしかなく、土井の言う「圏外」では「存在論的な不安にさらされてしまう」ので、その不安から救ってくれるのが「お守り」としての「だてマスク」であると主張する（同上：244-245）。堀井の言う「孤立する自己を守る」とはこういうことであったが、それは菊本が主張していた「本当の自分を守る」ために「本当の自分を隠す」マスクが手放せないということとの違いを見いだすのは難しい。

菊本の著書に登場する証言者たちは特定の誰かとの、あるいは特定の状況に置かれる際の、濃密で閉じた空間と時間において「だてマスク」を着用していた。かといってマスク着用によって全面的に離脱できるわけでもない。そうであるなら、「圏外」になるかもという不安を宥めるよりは、「圏外」とならないように「キャラ」を受け持つためのエネルギーをその場で節約して持続可能にするのか、別の場所で節約してエネルギーを振り向けるのかは、当事者に聞かなければ分からないが、堀井がそれを確かめるわけではない。

20世紀末に筆者は、社会学における偉大な先達であるジンメルにこと寄せて、次のように記したことがある。19世紀の最後の年に刊行されたジンメル『貨幣の哲学』には、人々のプライバシーが充満し、多数多様な視線が交錯する大都市の広場での人々の苛立ちが記されてい

た。西欧における産業革命の進展は、19世紀の後半から大都市に多数多様な人々を引き寄せた。19世紀末の大都市の広場は、常に多数多様な人々が集積し、行き交う場となっていた。広場はその広がりによる茫漠によって人々を悩ませたのではない。大都市の広場は、多数多様な人々に否応なしに同じ時間と空間を過ごさせ、見たくもないものを見せ、聞きたくもないものを聞かせる場所となっていた。多数多様な視線の交錯は、想像上の「お節介な」視線を生みだし、人々は広場の「狭さ」による「相互主観的閉所嫌悪」を昂ぶらせていた。ジンメルは、見知らぬ者同士の過度の接近によって「知覚過敏」が引き起こされていると考えた。それが「広場嫌悪（Agoraphobie）」である。

広場嫌悪を緩和する新しい術策が必要になる。スタイルの増殖である。大都市住民には「こだわりのなさ」が不可欠ということになる。「人それぞれでいいんじゃない」、「趣味の問題なんだから」とやり過ごす術（柿本 1999: 28）。

「知覚過敏」を緩和し、精神のエコノミーを維持するには複数の「キャラ」の切り替えは必須となる。押し寄せるプライバシーをやり過ごす補助具としてならば、長くその中心に新聞や雑誌があった。お望みであればサングラスや帽子を加えることも可能である。1980年代はじめのウォークマンの普及、1990年代半ばからの携帯電話の普及とその後のスマートフォンの登場など、補助具のバリエーションは確実に増えてきた。補助具が「希薄な人間関係」を実現したのであれば、それ以上の補助具の登場はなかったであろう。「広場嫌悪」を緩和する新しい術策の登場にもかかわらず、「相互主観的閉所嫌悪」は高まり続ける。空間はより狭小となり、濃密な人間関係がさらに押し寄せてくる、と人々が心の内で感じるからこそ、補助具は増殖し続けるのである。

5. おわりに

日本衛生材料工業連合会による「マスク生産（国内生産・輸入）数量推移」にある家庭用マ

スクの数量の推移を見てみよう。2008年は12億枚であるが新型インフルエンザの流行のあった2009年には32億枚となる。しかし2010年は3億枚に激減する。東日本大震災のあった2011年は54億枚に激増するが、2012年は23億枚に半減する。2013年は約30億枚となり、その後は2017年に40億枚、コロナ禍前の2019年には50億枚となる。2020年は110億枚、2021年は147億枚となり、2022年は約74億枚であった(URL1)。

このマスクの数量の増大を新聞記事も取り上げてきた(読売2015a; 読売2015b; 読売2020)インフルエンザ、花粉症、微少粒子状物質(PM2.5)への対応を増加の「正当な」理由を挙げる一方で、「不当な」増大理由として「だてマスク」の寄与を述べるのである。「ここ数年で『だてマスク』という言葉も耳にするようになった」(読売2015a)「他人の視線を避けるための『だてマスク』が最近、増えているらしい」(読売2016)「近年、話題となるのは『だてマスク』ともいわれるファッションや顔隠しのアイテムとしてのマスクである」(毎日2016)「最近『だてマスク』と言うらしい。……(中略)……健康上の必要がなくてもマスクをつけることを指す」(読売2020)。「ここ数年」「近年」「最近」とあるように、「だてマスク」が言葉として登場した時期は曖昧なままでありながら、問題行動として登録し続けられてきたのである。

「健康上の必要」ということで異物の体内侵入を防ぐには家庭用マスクでは心許ないことが指摘され、目的の実現にはしかるべきマスクが必要であるとの指摘は、既になされている(大西2019)。しかし公衆衛生を専門とする大西もまた「だてマスク」は「社会問題になっている」と言う。「心の拠り所としてマスクを着用するのは自由なのですが、何か淋しさを覚えるのは私だけでしょうか」と述べることで、大西の抱く規範の客観性を言いつのる。そして「自由」と言いながら、大西もまたマスクの着用それ自体を彼自身へのメッセージとして受け取る(同上:36)。大西もまた「こだわりのなさ」を持ち合わせていないのである。

2023年5月以降、新たなコロナウイルスの変異株の登場が報告され、感染者数の増大が報告されるようになった。ワクチン接種も「予防」はできずに重症化のリスクを低減させることし

かできない。感染者が増大し「第9波」の到来となれば、公衆衛生の専門家や政府はマスクの着用を推奨するであろう。流行病(pandemic)が文字通りに誰もが感染する可能性を意味するならば、家庭用マスクではその罹患を防ぐことができないのはよく知っているが、マスクの着用は止むことはない。その一方で、マスクの着用の有無にかかわらず感染の可能性が等しいとなれば、マスクを着用しないという選択もありうる。ここでは、「そういう人もあるよね」というスタイルの増殖を唯一の視線と尺度でもって押しとどめることはできない。

その作法を今後コロナ禍が終息したときに「だてマスク」についても発揮できるのかは、親密な関係性を前提とする友人・恋愛・結婚そしてキャリア形成においても自己主張的であることが重要であるとするこれまでの価値観に対して、人々が「こだわりのなさ」をどのように発揮するかにかかっている。目を向けるべきは、マスクを着用するかしないかではなく、そのことを巡ってどのような言葉をもって人々が語るのかであり、その語りの帰趨こそ分析されねばならないのである。

文献一覧

【日本語文献】

- 朝倉聡(2012)「社交不安障害の現在とこれから」『精神神経学雑誌』114(9)、1056-1062。
- 朝倉聡(2015)「社交不安障害の診断と治療」『精神神経学雑誌』117(6)、413-430。
- 朝日新聞(2011a)「(いま子どもたちは)よそおう:1マスクで隠す素の自分『何となく落ち着く』」『朝日新聞』2011年1月19日。
- 朝日新聞(2011b)「キャラ意識『自分のよう』同世代から共感・応援」『朝日新聞』2011年2月6日。
- 朝日新聞(2011c)「天声人語」『朝日新聞』2011年2月17日。
- 朝日新聞(2011d)「大人もだてマスク」『朝日新聞』(夕刊)2011年2月17日。
- 朝日新聞(2023)「(フォーラム) コロナで何が変わった?:1マスク生活」『朝日新聞』2023年6月18日。
- 大西一成(2019)『マスクの品格』幻冬舎。
- 音羽健司・森田正哉(2015)「社交不安症の疫学—その概念の変遷と歴史—」『不安症研究』7(1)、18-28。
- 柿本昭人(1999)「[都市の傷痕とRe=publik 4] 広場嫌悪とスタイルの増殖」『10+1』17(1999年6月)、INAX出版、28-29。
- 菊本裕三(2011)「『だてマスク』依存症—無縁社会の入り口に立つ人々」扶桑社。

櫻井龍彦（2013）「社交不安障害の臨床社会学に向けて」『浜松学院大学研究論集』9(2013年3月)、1-18。

志村圭祐・田中速（2017）「マスク着用行動の類型化に関する予備的研究：社交不安への対処に関する行動・安全確保行動」『東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究』17（2017年3月）、27-34。

女性セブン（2011）「若者たちに急増中 マスクなしで出かけられない症候群 風邪でも花粉症でもないのになぜ？ 自分の本音を他人に知られることが怖い若者たち」『女性セブン』2011年3月10日号、小学館、65-67。

日本経済新聞（2021）「春秋」『日本経済新聞』2021年1月21日。

堀井光俊（2012）『マスクと日本人』秀明出版会。

毎日新聞（2016）「余録：『マスクをかけぬ命知らず！』。すごい脅し文句だが…」『毎日新聞』2016年2月19日。

読売新聞（2011）「『よみうり時事川柳』長井好弘選」『読売新聞』2011年2月13日。

読売新聞（2015a）「[交差点] マスクが防ぐモノ」『読売新聞』（新潟版）2015年2月8日。

読売新聞（2015b）「マスク おしゃれも機能も 小顔に見せる効果、光触媒で分解」『読売新聞』2015年12月29日。

読売新聞（2016）「よみうり寸評」『読売新聞』（夕刊）2016年1月30日。

読売新聞（2020）「編集手帳」『読売新聞』2020年1月6日。

読売新聞（2023a）「[社会部 ↔ あなた 言わせて聞かせて] マスク あなたの判断は？」『読売新聞』2023年3月5日。

読売新聞（2023b）「[論点スペシャル] マスク着脱『個人で判断』」『読売新聞』2023年3月9日。

【外国語文献】

Deleuze, Gilles. (1967) *Présentation de Sacher-Masoch*, Paris. (=1973、蓮実重彦訳『マゾッホとサド』晶文社。)

【URL】

1 日本衛生材料工業連合会(2023年)「マスク生産(国内生産・輸入)数量推移」(2023年6月14日取得、<https://www.jhpie.or.jp/data/data7.html>)。